

## 「稲盛哲学」に学ぶ

### 1. 稲盛さんの2つのポイント

過去2回、稲盛から学んだことをご紹介します。まず

**「成果」＝「考え方」x「情熱」x「能力」**

という稲盛流の「成功の方程式」で、もう一つは「5つの視点」でした。右掲は、この2つの哲学の関係をクロスしてみたものです。ヨコ軸は、「考え方」としていますが、「5つの視点」であります。これがベースであり、このレベルを引き上げるのが「情熱」としたのです。

稲盛さんの「成果」＝「考え方」x「情熱」x「能力」という公式の3つの要素のうち、前2つの要素を重視しているのです。

まず「考え方」(5つの視点)を共有して、一つの「課題」毎にレベルを引き上げる事が重要になります。

「5つの視点」は右掲ですが、これらを実践するのは「人」なので「情熱」というものが大きく物を言うのです。情熱は、

「成功への情熱」PASSIONとして教えられており、

・Profit「利益」: 売上げを最大限に伸ばし、経費を最小限に抑える。利益を追うのではない。利益は後からついてくる。

・Ambition「願望」: 潜在意識に透徹するほどの強く持続した願望を持つ。

・Sincerity「誠実さ」: 商いの相手の身になって行動する。

・Strength「真の強さ」: 強さとは勇氣である。決して卑怯な振る舞いがあってはならない。

・Innovation「創意工夫」: 昨日よりは今日、今日よりは明日と、自分の創造性を発揮して、常に改良改善を続ける。

・Optimism「積極思考」: 常に明るく前向きに、夢と希望を抱いて素直な心で。

・Never give up「決してあきらめない」: 誰にも負けない努力をする。地味な仕事でも、一歩一歩堅実に、努力を怠らずにやり遂げる。

(経営を行う上でもっとも重要な七つの言葉(成功への情熱・「PASSION」 by 稲盛和夫)

というものです。この「成功への情熱」が強い人が集団の「5つの視点」に従ってレベルを引き上げるのだと言えます。

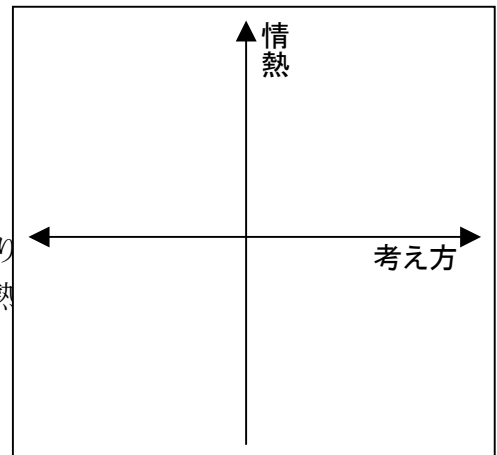
### 2. 「能力」について

このように、稲盛流「成功の方程式」の3つの要素があるのですが、最後に位置づけられているのが「能力」なのです。先行の「考え方」や「情熱」が確立すると、その実践において現実の「壁」と対峙することで自ずから「経験」というもので「能力」が引き出されるという考え方になります。すなわち、「考え方」x「情熱」⇒「能力」に迫る構図になるのです。

従って、「考え方」＝「儲けるための5つの視点」を身につける必要があるのです。すなわち、

1. 得意な事に集中しているか？

2. 3つの最適化が出来ているか？(・コスト・技術&技能・プロセス)



#### 儲けるための「5つの視点」

1. 得意な事に集中しているか？
2. 3つの最適化が出来ているか？  
・コスト・技術&技能・プロセス
3. 高い固定費でムダな事をしていないか？
4. 人材育成が出来ているか？
5. 3つ以上の価値ポイントがあるか？

稲盛さんの著書より

3. 高い固定費でムダな事をしていないか？
4. 人材育成が出来ているか？
5. 3つ以上の価値ポイントがあるか？

と常に自問自答する必要があるのです。

意外に難しいのは「3. 高い固定費でムダに事をしていないか？」という視点です。サラリーマンというレベルでいると「人」を効率的に動かす「流動化」や「多能工化」ということについて「甘く」なってしまう「ぬるま湯体質」に陥りやすいのです。カンタンにアメーバ経営と言いますが「流動化」するには、複数の業務に精通している必要があるのです。例えば、ある企業では試作品を作る人が、実際の量産工程にも絡み、現実にかかる問題を身で体験することでスルーな能力を身につけるようにされています。「試作」は「試作」、「量産」は「量産」と分離してしまうと「技術」と「技能」がバラバラになってしまい「質」や「量」の両面で支障をきたすのです。

ここでも示されているように「クロス」という事が重要なのです。「私は〇〇する人」という固定観念を排除していく事が重要なのですが、その「やり方」が問題です。いきなり「5つの視点」を押し付けるのではなく、実際に現実の問題にぶつかりながら現場で教えることが重要です。観念論を押しつけるのではなく「経験」というものを通して植えていくことなのです。

従って、目線を合わせる必要があるのです。会社での「地位」というものがありますが、「地位」が尊敬を引き出すのではなく「人柄」なのです。「ザイアンスの法則」というものがありますが、その中に、人はその人間的な側面に接した時に大きく感動するとありますように「壁」を克服する時に与える「経験」に感動するのです。まさに、山本五十六元帥の「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」に相通じるものがあります。そのような接触を繰り返す中で「気づき」が起こり、「自立化」し始めるのです。この「気づき」の瞬間を禅宗では「啐啄の機」と言っています。相手が「ピヨ」と鳴く瞬間に「啄つく」という事なのです。ぜひ、「押し付け」ではなく「啐啄」という「気づき」を重視にして欲しいと思います。

「人」の「能力」はDNAという要素では無限にあります。能力の数%しか使っていないとも言われますが、その中から、自分の得意(楽しい)と思えることを通して「才能」を引き出して行くのです。私は「デキル」<sup>3</sup>というやり方を提唱しています。手のつきやすい事から始めて「できる」「できる」また「できた」という連続3回の法則で「自信」をつけさせて行くのです。これから引き出される「能力」は「学力」というものでは推し量れないものがあり、人それぞれに輝く「才能」が埋もれているのです。そのキーが「楽しい」という事であります。「デキル」<sup>3</sup>のやり方で「楽しい」を実感するように指導する事が重要と思っています。